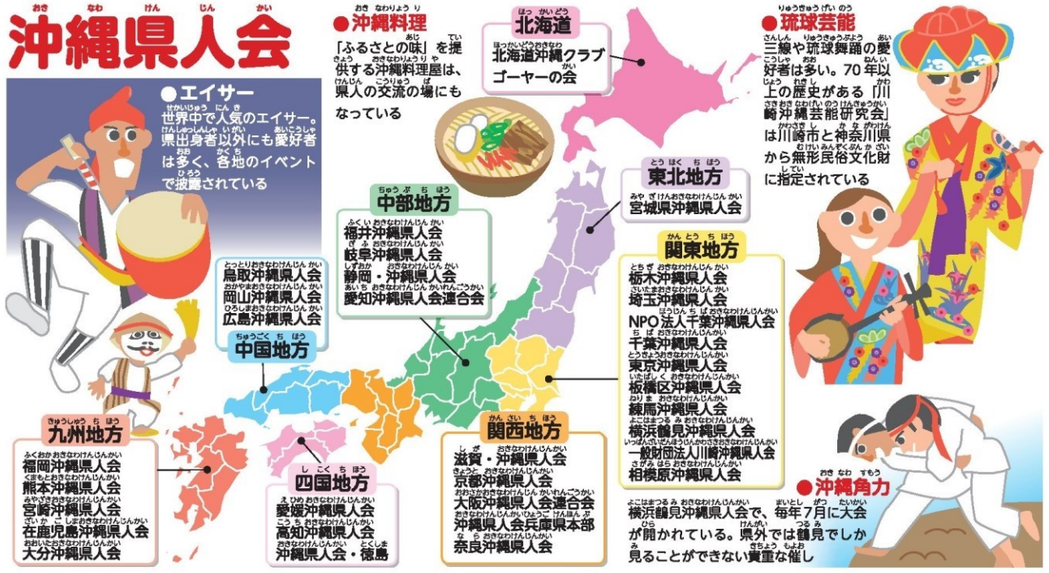
海を越え つながる輪

世界のウチナーンチュを知ろう

⑰

本土出稼ぎ
差別の歴史乗り越え

戦前、多くの県民が出稼ぎのため日本本土に渡りました。彼らは言葉や風習の違いから差別されることもある中、過酷な労働に従事。故郷・沖縄を思い、慣れない土地で助け合いながら暮らしました。



女性の出稼ぎ多く

1854年に開国した日本は、明治政府の富国強兵政策で次々に近代的な工場が稼働し、多くの労働者を必要としていました。1890年代後半には、遠い沖縄からも労働者を募集するようになります。男性は鉄工所や築港、炭鉱に向かい、女性は紡績（繊維産業）で働きました。

海外移民は男性単独や家族での移民が多いのに対し、本土出稼ぎは若い女性が半数を占めました。尋常小学校を卒業した14～18歳の女性が多く渡航。短期労働で何度も出稼ぎに行く人もいました。昭和に入ると比較的裕福な家庭の娘も「結婚前に一度は紡績に」と海を渡りました。

生活の糧求め大都市圏へ

沖縄からの本土出稼ぎは1900年頃から増加し、20年代には集団的な出稼ぎとなります。ソテツ地獄と呼ばれる慢性的な不況にあえぐ県民は、現金収入を得るため、海外移民と比べて容易に渡航できる本土出稼ぎに向かいました。阪神、中京、京浜などの工業地帯で、男性は鉱山や工場で、女性は大型紡績工場で働きました。1900年代初頭から太平洋戦争にいたる40年間に沖縄から本土に渡ったのは延べ15万人。義務教育を卒業したばかりの若者も多く、低賃金で長時間労働を強いられました。劣悪な労働環境でけがをしたり、病気になったりする人もいました。沖縄県民への差別や偏見も根強く、不況に陥ると真っ先に解雇の対象になりました。

日中戦争が拡大した1938年、政府は国家総動員法を公布。軍需工場などに送り出す労働者の確保のため、自由な出稼ぎは難しくなります。県外に出るために指定の工場で一定期間働き、それから目的地を目指す例もありました。

終戦後、米統治下にあった沖縄に、1957年、大阪の県人から求人要請が届き、中学・高校を卒業した若者の集団就職が始まりました。新しい生活と仕事を求め、多くの若者がパスポートを手に海を渡りました。新卒者以外にも、親戚や知人のつてを頼り、沖縄県民が多く住む大阪市大正区、横浜市鶴見区などの「沖縄タウン」に出稼ぎに行く人も増え、70年には年間18万人もの県民が日本本土に渡りました。

集団就職のため東京に向かう若者たち。見送る友人や家族はテープで別れを惜しんだ＝1970年3月、那覇港

県人会の歩み

活動の根底に沖縄への思い

全国には33の沖縄県人会があります。戦前、日本本土では「沖縄人お断り」の貼り紙を掲げる店があるなど、沖縄への根強い差別がありました。そのような中で、県人は沖縄県人会を組織し、生活を支え合い、絆を深めてきました。

最も古い歴史を持つのは、神奈川の川崎沖縄県人会。川崎には大正初期から出稼ぎで渡った県人が住んでいました。1923年の関東大震災で被災した県人を支援するため、24年に川崎沖縄県人会が発足。会員の多くは富士瓦斯紡績の女性工員で、県人会は彼女らの待遇改善運動を支援しました。三線や琉球舞踊が盛んで、沖縄芸能を伝える「川崎沖縄芸能研究会」が川崎市と神奈川県の無形民俗文化財に指定されています。

1890年代末から県人が出稼ぎに渡った大阪各地でも、県人会がつくられました。それらは戦争で解散しますが、戦後すぐの46年、日本から沖縄が切り離され国家的な保護の枠外になってしまった県人が生き抜くため、沖縄人連盟関西本部を立ち上げます。52年に大阪沖縄県人会連合会に名称を変更し、在阪県人の生活保障や、沖縄の戦災補償と復興を掲げ活動。集団就職の支援や日本復帰運動にも力を注ぎました。

戦後まもなく、疎開者や復員者に手を差し伸べるために結成された沖縄人連盟や、沖縄復帰運動などの組織的な活動が発展し、1956年、東京沖縄県人会が発足しました。復帰後も、沖縄の基地問題解決に注力し、2007年の教科書問題では「沖縄戦の実相をゆがめてはならない」と声を上げ、検定意見撤回を求めました。

戦後すぐの1946年、沖縄への引き揚げ者の支援をきっかけに沖縄県人会兵庫県本部がつくられました。沖縄への渡航手続きの代行や集団就職先への慰問、復帰運動への支援などに力を入れました。50～60年代、増加する沖縄の結核患者の窮状を知った兵庫県本部は、重症患者の本土治療受け入れに奔走。61年4月に兵庫県の国立療養所「春霞園」に11人の患者を受け入れたことを皮切りに、84年までに2800人超の結核患者を送り出す道を開きました。

現在、多くの県人会が「沖縄好き」の県外出身者にも門戸を開いています。活動内容や構成員は時代と共に変化しても、活動の根底には今も昔も沖縄を思う気持ちがあります。

全国の県人会が隔年で集う全国沖縄県人会交流会でカチャーシーで盛り上がる県人たち＝2019年10月、神奈川県横浜市のロイヤルホールヨコハマ

ステキな女先輩！

伝統受け継ぎ次代に

東京中野区新風エイサー会長 前川 一朗さん(23)

那覇市与儀出身の前川一朗さんは、東京大学で生命科学を学んでいます。県出身者のための男子学生寮・南灯寮に住み、学生団体・東京中野区新風エイサーの会長として、週に数回エイサーの練習に励んでいます。「東京に来てから沖縄の良さ、エイサーの奥深さが分かってきた」と力を込めます。

前川さんがエイサーと出合ったのは高校時代。文化祭で披露するため2カ月練習に励み、当日喝采を受けました。東京大に受かり、父親の勧めで南灯寮に入寮。寮生に誘われて、新風エイサーに加入します。新風は設立21年目の地元に密着したエイサー団体で、中野チャンプルーフェスタをはじめ東京近郊のイベントでエイサーを披露しています。加入して1年目に全島エイサーまつりにも県外枠で参加しました。前川さんにとって、高校の文化祭以来のエイサーでしたが、仲間と練習を重ねる中で「がっつりハマった」そうです。

20、21年はコロナ禍で思うような活動はできませんでしたが、現在新風20周年式典に向け、練習に励んでいます。設立当初のOBにも話を聞き、「東京のエイサーの歴史を背負うプレッシャーを感じているが、後輩たちにつないでいけたら」と前を見据えます。

前川さんは沖縄の子どもたちに対し、「沖縄の存在が頑張る原動力になる。沖縄の歴史や文化を学び、外の世界に向かってほしい」と呼び掛けました。

中野チャンプルーフェスタでエイサーを披露する前川一朗さん（右端）＝2022年7月、東京都中野区

全国に広がるエイサー

沖縄を代表する芸能・エイサー。関東で初めてエイサーまつりが行われたのは1975年、横浜市鶴見区で開催された「エイサーの夕べ」でした。その後、県出身者の権利を守るために活動した「ゆうなの会」と合併してできた東京沖縄県人会青年部も、沖縄文化を広めるためにエイサーを披露しました。90年代以降、沖縄ブームが高まり、いくつものエイサー団体が結成され、県外出身者も親しむようになります。現在、新宿エイサーまつりや中野チャンプルーフェスタなどが都内で開催されています。

県出身者が住民の4分の1を占めるという大阪市大正区では1975年、「沖縄青年の祭り」で初めてエイサーを披露しました。「沖縄の誇りを取り戻そう」と始まったこの祭りは、今では区内外から2万人を集めるイベントに成長しました。

各地のエイサー団体の中には、阪神淡路大震災や東日本大震災の慰問を機に結成されたものも。勇壮な太鼓の響きは人々を勇気づけ、その地域と沖縄をつなぐ架け橋となっています。

新宿エイサーまつりで勇壮な演舞を披露する出演団体＝2018年7月

紙面制作・熊谷樹、上原明子　（毎月第1週掲載）

無断複製・転載を禁じます